

## 東京家政大学学園での武蔵野の森の復活を目指して

中村 信也\* 越尾 淑子\* 湯山 隼之助\*\* 亀井 裕幸\*\*\*  
大澤 力\* 浅川 真理\*\* 宮澤 弘二\*\* 菊池 健夫\*\*\*

Reproduction of Musashino Native Forest of The Tokyo Kasei University

Nobuya NAKAMURA, Toshiko KOSHIO, Junnosuke YUYAMA, Hiroyuki KAMEI  
Tsutomu OOSAWA, Mari ASAKAWA, Kouji MIYAZAWA, Takeo KIKUCHI

### 1 はじめに

東京家政大学が文京区（当時湯島区）の本郷から現在の地に越してきたのは、昭和21年4月であった。新天地は鬱蒼たる森と草地在り、森の中に校舎が点在するという様子であった。この深緑は学園の誇りとされ、校歌の出だしに「武蔵野の木立も深く、鳥歌う緑の丘辺」と詠われ、愛唱されてきた。

緑は学園のアカデミズムさに華を添え、かつ学生や職員に心の安らぎを与えてくれる。例年、進路案内のためにオープンキャンパスが年数回なされるが、訪れた学生に学園の何に魅力を感じるかのアンケートをとると、必ず「学園の環境の好き」が上位に定位する。学園の環境の好きとは豊かな緑を指しており、家政大学は都内の交通の便利なところに位置し、かつ豊かな緑を有するという強みを持っている。構内の緑は学園のシンボルであり、貴重な財産である。

しかしながら、学園の緑は次第に消失しつつある。緑がコンクリートに変わられてきたのは日本のどこでも生じた現象である。日本は高度経済成長により開発という美名の下に緑の破壊が進行してきた。わが学園も施設の充実と近代化の美名のために緑が犠牲にされてきたことは否めない。移転直後より学園内の土手の土は谷に埋められ、小屋的な煉瓦造りの火薬庫の校舎は、広い面積をもつ建物に変わられてきた。学園の施設充実には緑地を削って箱物を作ってきたが、それはまさしく日本の開発の縮図であった。日本では開発により緑地がセメントで固められたことに反省が生まれてきており、緑の消失に神経質になってきているが、学園では依然として建物の充実という美名下に緑の減少が行われている。

移転から最近までの煉瓦校舎の建替えの時代を第一期建替期と形容できる。これらの建替えは4階建ての建物に変えることであったが、それはほぼ終了したといえる。120周年の校舎にみるように、いよいよ低層校舎の高層ビルへの建替えという第二期建替期に突入したといえる。高層ビル化は敷地の広さも要することから、緑の減少が懸念される。120周年記念棟の建替え

---

\*東京家政大学生生活科学研究所 \*\*東京家政大学附属中学校・高等学校

\*\*\*東京都北区地域振興部防災課

は設計の段階から、緑の減少が問題視され教授会で議論なされてきて、建築物周辺の緑を削る代わりに、1号校舎の撤去と跡地を緑化することで問題は沈静した。現在、4号館の建替えが始まっているが、大木が5本伐採され、多くの中・小木が伐採され、緑地の一部を失った。

当研究会は今後の校舎の高層化建替えに対して、緑の確保をどうすればよいかを考え提案することを目的として発足した。学園の緑の現況を探り、現状の中から緑地を増加させて、学園の者に緑を意識させ、緑の消失を防止しようとするものである。そして、学園内に校歌にあるような「武蔵野の森」を学園に再び築き上げることを目的としている。

## 2 武蔵野

武蔵野とは、東京都と埼玉県に広がる台地（図1）、すなわち、武蔵野台地上の地域を指している。古来より関東地方は関八州に分かれていた。八州とは相模、武蔵、下野、上野、常陸、上総、下総そして安房であった。この中で、武蔵国は、武蔵野と呼ばれる地域より広く相当していたが、国の南部分が武蔵野であった。

武蔵野台地は、秩父多摩山系からの流れ出る水で生じた扇状地に、火山活動による降灰が加わり形成されたもので、地形学的には青梅、飯能を扇頂とする扇状地である<sup>1)</sup>。

武蔵野台地の境界は、西部は青梅と飯能を、東部は東京湾側、北部は入間川と荒川、南部は多摩川で区切られる長方形の台地である。

この境界は肉眼で明瞭に確かめることができる。北側台地縁を入間川と荒川に沿い下流に下ると、川越、朝霞、志村、赤羽などに右岸に段丘崖としてみることができる。東側台地縁は赤羽から京浜東北線に沿って東京駅方面に南下してゆくと、王子、田端、上野と右手側に段丘崖を明瞭にみることができる。東側縁は東京駅、品川、蒲田まで続いている。南側は多摩川が境である。蒲田より多摩川に沿って青梅まで遡ると、調布、立川と右側に段丘崖をみることがで

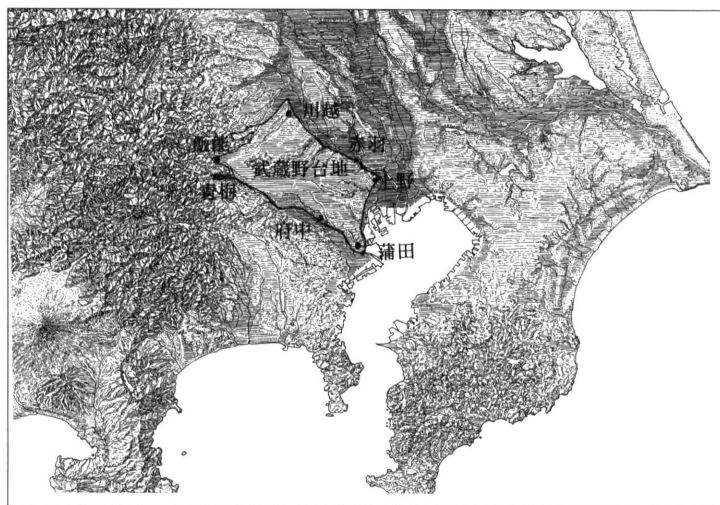


図1 武蔵野台地

きる。

武蔵野台地の海拔高度をみると、最も高い地は青梅の180mである。台地は徐々に高度を落とし、丘崖として終わっている。台地端の高さをみると、北縁では朝霞、志村で20m、赤羽30mであり、東縁では王子40m、半蔵門30m、高輪50m、蒲田30mで、南縁では田園調布30m、府中37mの高度である。このように武蔵野台地は西部の秩父多摩山系から東部に緩やかに下ってくる傾斜をもち、段丘崖で終わっている。台地縁の外側は海拔高度数メートルの沖積低地である。ちなみに、東京では台地上を山の手、台地下を下町と呼ばれる。この境界を京浜東北線が走るが、当線はかつて山手線と呼ばれていた。

武蔵野台地の地層の構造は、洪積世第四期に生じた扇状地堆積物である礫層に、関東地方の火山活動による降灰が堆積したものとなっている。この火山灰層を関東ローム層と呼び、その厚さは武蔵野台地では6～8mである。この台地は小河川により開発され、台地内には小さな台地形が発達している。ただし、関東ローム層は保水力が弱く、乾燥しやすい赤土であるため、武蔵野台地では水が得にくく、大きな集落は開析谷、とくに、湧水地周辺に限られていた<sup>1)</sup>。

### 3 武蔵野の森

#### (1) 武蔵野の森の成立

武蔵野台地上には黒ボク土と呼ばれる黒色土が関東ローム層上にあるのが特徴である。黒ボク土は火山灰地の上にススキなどイネ科草本が腐植したものとされているので、日本各地に見られるが、特に関東地方では発達していて、古来よりススキなどのイネ科植物が濃密に存在していたことが窺える。このことから武蔵野台地では、古代より草原が広がっていたと思われる。

関東ローム層は保水力が悪く、稲作はなされていなかった。飲料水については深い井戸に頼っており、水の確保が大変であった。稲作に向かず、飲料水に不自由するため、人口扶養力は低く、江戸時代までは大きな都市の発生は、川越、府中など台地縁に限られていた。しかし、武蔵野台地でも開析谷の周辺では湧水に恵まれ、三法寺池（練馬区）、善福寺池（杉並区）、井の頭池（武蔵野市）など湧水量の多い場所では集落はそれなりに形成され、砂漠地帯のオアシスの様を呈していたようである。

このように武蔵野台地では、崖線部以外では農家が防風林と薪、落ち葉の堆肥利用のために植えた農用林・屋敷林が樹林地のほとんどであった。しかし、江戸の街が拡大し、神田上水、玉川上水が整備され、江戸の人口が急増するにつれ、急速に台地上に町が形成されるようになり、次第に武蔵野は江戸という大都会への物資提供地に変貌していった。畑の作物は食糧として運ばれ、江戸向けの薪炭用や家屋用や木工用のための産業用の森林が求められてきた。それまでの農用林・屋敷林が、江戸向けの商品となっていった。武蔵野は人家周辺に存在する森、いわゆる里山林が所々に見られる独特の風景に変化していった。

このように武蔵野の森は、近世に発達したものでヒトがつくりだした森林、つまり二次林である。果てなく拡がる広大な森は少なく、森林と畑と交錯して所々に存在するという武蔵野独特の風景が台地上に出来上がっていった。この雰囲気は国木田独歩の有名な短編小説（むしろ随筆というべき）「武蔵野」に描かれている<sup>2)</sup>。彼は当時東京の郊外であった渋谷に住んでいたが、当時（明治31年作品）の風景を次のように表している。

「武蔵野には決して禿山はない。しかし大洋のうねりのように高低起伏している。それも外見には平原のようで、むしろ高台の処々が低く窪んで小さな浅い谷を為しているといったほうが適当であろう。この谷の底は大概水田である。畑は主に高台にある。高台は林と畑とで様々な区画をなしている。畑は即ち野である。されば林とても数里にわたるものはなく否、恐らく一里にわたるものもあるまい。（中略）一座の林の周囲は畑、一傾の畑の三方は林、という具合で、農家がその間に散在して更にこれを分割している」

彼の作品は、武蔵野の森の美しさを賞賛したものであるが、武蔵野の美は主に秋から冬にかけての風情にあるとしている。その中に「秋天拭うが如し、木葉火の如くかがやく」という表現があるが、武蔵野の森の美は紅葉し、そして落葉することにあるとしている。

## （2）武蔵野の林の植生の特徴

現在の植生は都市化や地球温暖化などの人為によって改変されたものであるが、ある地域が本来ささえることができる自然の植生を、現在残存している植生と、環境との関係から推定しようとする方法がある。この手法で推定した植生を「今日の潜在自然植生」と呼ぶ<sup>1),3)</sup>。ただし、武蔵野台地では今日の潜在自然植生を現存の二次林から推定するのはかなり困難がある。そこで遺跡からの埋没木と花粉化石から推定する方法がある<sup>3)</sup>。これらから推定すると、武蔵野の森林の特徴は大まかにいって次の通りである。

- （1）武蔵野台地の主役は、落葉広葉樹であった。
- （2）常緑樹である照葉樹も存在していた。照葉樹は武蔵野台地の東部に行くほど多くなってゆく。つまり、海に近くなるほど優位性があった。
- （3）モミ、スギ、マツを主にした針葉樹も見られた。針葉樹は特定地域に見られ、飯能での松林は有名であった。すなわち、武蔵野では、前述のように草原が広がっていたが、その中に存在していた森林植生も現在の森林と組成的にはあまり変わらないものであったと考えられる。

武蔵野台地を被っている、黒ボク土はアルミニウムの活性が高く、リン酸吸着度が高いので、多くの植物は生育を阻害される<sup>3)</sup>。これが上記の武蔵野の森林植生の組成を特徴づけているとわれわれは考えている。ただし、現在われわれが見ている森林は潜在自然植生そのものではない。人間が手を入れることで成立した二次林であり、この地域では昔からこの森林を「雑木林」と呼んでいた。雑木林は本来雑草と同じ概念で、「その他の名もない木々」または「人間に有用でない木々」とのニュアンスがある。おそらくスギ、ヒノキなどの材木や、果樹や花木などに対する表現であろうが、今日では定期的に伐採される落葉高木林を指していることが多い<sup>4)</sup>。

雑木林の構成種のうち武蔵野に馴染み深い落葉広葉高木をみると、まずケヤキが挙げられよう。ケヤキ（櫟）は武蔵野に多い木であり高さ25～30mにも達する。板橋区の区木となっており、学園も正面の花壇内に株立ちのものがあり、学園の象徴にしている。ケヤキはニレ科植物で箒を逆さにしたように枝が広がるのが特徴である。木は堅く丈夫であり風に強いため防風林として植えられたが、材としても木目と色が美しく、かつ硬く申し分のないものがあり、屋敷林としてさかんに植えられていた<sup>5), 6)</sup>。

次に、コナラ（小櫟、単に櫟の木、またはハハソとも呼ばれる）があり、武蔵野の森の主役を担っていた<sup>4)</sup>。コナラはブナ科植物でコナラ亜属に属す。高さは15～20mになる。燃やすと火力が強いため燃料用として用いられる。また、切株から芽を出すので薪材として最適である。現在では薪炭用よりしいたけ栽培のほだ木として使用されている<sup>6)</sup>。

クヌギ（橡、別名ツルバミ）も武蔵野の代表木である。クヌギはブナ科植物であり、高さ20mほどになる。実が秋に実り、俗に「どんぐり」と呼ばれる。どんぐりは筆状の実を総称して呼ぶが、狭義のどんぐりは本種である。どんぐりは染色剤となり、これで布を染めると黒色となりツルバミ（橡）色と呼ばれる。また、コナラと同様に薪炭、しいたけ栽培用のほだ木として使用される<sup>6)</sup>。

クリ（栗）も武蔵野の森の代表をなすものである。クリの木といっても実の大きいタンバグリでなく、実の小さいシバグリである。当木もブナ科で、落葉高木で高さ25mほどになる。縄文時代には既に住居の周りに植栽培されていたといわれるほど馴染みが深い。果実採取が目的であるが、その材は木目がくっきりとし、木工用に適している<sup>6)</sup>。

エノキ（榎）も武蔵野を象徴するものである。武蔵野の森よりは街道の木として有名であった。風に強いので旅人に夏場緑陰を提供する木として江戸時代に政策的に植えられたようである<sup>5)</sup>。近隣には有名な王子の装束榎、板橋の縁切り榎がある。

アカシデも武蔵野を代表している。アカシデはカバノキ科の植物で、高さは15mほどになる。新芽が赤色でアカメゾロと呼ばれる。武蔵野では特に「ソロノキ」と称される武蔵野原産木があった<sup>7)</sup>。

次に武蔵野の照葉樹について述べてみる。照葉樹は亜熱帯から暖温帯に見られる常緑広葉樹で、葉が厚く光沢があるのが特徴であり、葉は小さいものが多い。日本は照葉樹林が多く、西日本では森林の主役をなす木である。照葉樹林帯は日本海側を除く西日本を帯状に分布するが、関東地方は帯の東端といえるので、武蔵野の森には照葉樹は少なかったと思われる。花粉化石の調査では照葉樹林は海岸近くに存在していたようで、武蔵野台地では発達が少ない<sup>3)</sup>。しかし、屋敷林の防風性という点からみると、常緑樹は必要不可欠なものであったから、積極的に植木されていたといえる。主な照葉樹として、クスノキ、タブノキ、スタジイ、カンなどの高木、ツバキ、サカキ、チャノキなどの低木がある。

武蔵野を代表する照葉樹をみると、カンとシイの木がある。カン（榿、榿）はブナ科コナラ属の常緑樹を総称して言っている。落葉広葉樹のコナラ属種と同様にどんぐりの実をつける。

カシにはアカガシ、イチイガシ、ツクバネガシ、シラカシなどの常緑樹があるが、武蔵野を代表するものといえばシラカシである。シラカシは武蔵野の潜在自然植生であったとも言われている。高さ25mにもなる高木で寿命も長い。数十年の木は固く種々の用途がある。武蔵野台地では防風林として有用され、枝を横に這わせ、高さ4～8mの高い生垣にされていた。

シイ（椎）はカシと同様にブナ科である。ツブラジイ、スタジイ（イタジイ）、マテバシイがあるが、武蔵野を代表するのはスタジイである。この木も高さ25mにもなる高木である。シイの実は食用となり、材は家具用になり樹皮は染料となり有用であるが、防風林として利用されていたと思われる。

#### 4 東京家政大学（板橋校舎）の森

##### （1）家政の森の変遷

家政大学が文京区（当時湯島区）の本郷から現在の地に越してきたのは、昭和21年4月のことであった。加賀国前田藩下屋敷（上屋敷は本郷の東京大学）であったが、明治以降陸軍管轄の国有財産となった。陸軍省板橋火薬製造所からやがて第二造兵廠となった。そして、終戦後軍施設としての役割を終え、昭和21年4月から家政大への貸与が始まった。家政大は国有財産の一時使用許可という形で新天地でのスタートを切った。

移転してきたころの様子は、渡辺学園百年史<sup>7)</sup>によると「こんもりと茂った林の中に教室が点在し、メジロ、セキレイ、コジュケイなど小鳥の声を聞く自然の風趣豊かな高台の緑苑であった」と記されている。学園の中は、火薬倉庫だった平屋建ての建物が多く存在し、それを教室として使用していた。建物は、壁は厚いレンガづくりで、屋根は爆発エネルギーを発散させやすいように板張りであった。当時は小動物も多く、野ウサギを見たという人もいる。

家政大の構内はかつて野草の保存地でもあった。というのは、長い間地方人禁製の軍機秘密工場であったから、踏み荒らされることもなく、野生植物は保護されることになっていた。移転当時はキキョウ、ヤマユリ、ゲンノショウコをはじめ、約150種の野草が確認できた。秋にはススキが一面に生い茂っていたそうである<sup>8)</sup>。

当時は学園の正面は、現在の正門より50m南寄りにあったが、入り口に入ると、まず、木立が茂り、林をなしていた。緑は学園の象徴をなすものとして保護育成されてきた。樹木はカシ、マツ、シイなどの常緑樹が中心だった<sup>9)</sup>、大きなクスノキも多かったようである。クスノキは学園のシンボリック樹木として現在の5、6号館と附属高校の体育館に挟まれたところの笹が植えられている円形花壇があり、その中央にクスノキが植えられていた。ところが枯れてしまい、いつの間にか他のクスノキも学園から消えてしまった。現在ではシンボリックの樹は正門前の円形花壇内のケヤキに変わられた。クワの木も多かったようであるが、いまはそれもほとんど消えてしまっている。

学園の緑の様相が変わりだしたのは、100周年記念事業のころからである。100周年記念の建築のため古木が伐採されていった。附属高校、中学体育館、大学美術棟など次々と高層化され

てゆくと、その都度緑は減少していった。

このように、学園内の緑の減少は昔を知る教職員や卒業生にとっては悲しむべきことであり、保存にはそれなりの努力が払われてきた。昭和42年には第四本館前の庭は造園設計家により造園された。武蔵野の森の再現を狙い落葉高木ケヤキ13本、武蔵野原産のアカシデ5本、カロリナポプラ8本を植樹している<sup>7)</sup>。記念植樹は熱心にやられたようで、昭和31年にスギ50本、昭和43年の卒業生がトチノキ20本、ハクモクレン20本（共に運動場周辺）、ユリノキ10本、イトヒバ30本、ケヤキ7本、翌年にヤエザクラ200本、ソロ2本となっている<sup>7)</sup>。既に30余年経ているので、かなり大きくなっているはずであるが、現在の本数からいってかなりの樹木が伐採されていったようである。

現在の学園の主木立である120周年記念棟と生活研究所前の樹群は、昭和20年代に被服の建物があったが、100周年記念本館の完成に合わせて、昭和42年に旧建物は撤去され、造園設計家の川瀬篤美氏の設計で植林造園されたものである。落葉広葉樹を主としており、現在は見事に武蔵野の樹群を復活しており、わずか2, 30年で学園内一の美しさを持った樹群に変身している。

## (2) 構内の大木

板橋区の保存樹木の条件は、地面より1.5mの高さで幹周囲の長さが1.2m以上あることである。今回調査の結果、構内の中でこの条件を満たす木は133本であった。これらの一覧表(表1)と所在地図を作成した(図2)。

最大周囲を持つ木は三木ホール前のスダジイ(昭和55年保存木)で、3.25mの幹周りがある。次いで運動場前のポプラで2.77m、9号館前のスダジイ(昭和54年保存木)の2.74m、三木ホール前のスダジイ2.70m、5号館前のスダジイ(昭和54年保存木)の2.69mである。

133本の種類をみると、スダジイが最も多く43本、ヒマラヤスギの25本、シラカシの22本、

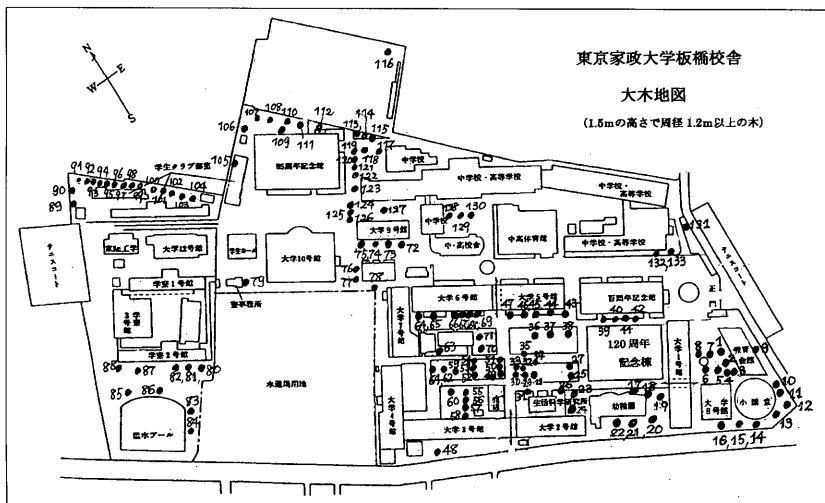


図2 東京家政大学板橋校舎 大木地図 (1.5mの高さで周径1.2m以上の木)

表1 東京家政大学構内大木一覧表

登録番号	区域	周囲	種類	場所保存	樹木番号
1	A	1.41	ヒマラヤスギ	A；三木ホール前	
	A	1.18	マツ		
2	A	1.46	ヒノキ		
3	A	3.25	スダジイ		保55
4	A	1.84	スダジイ		保54-1103
	A	1.05	ヒノキ		
5	A	1.97	スダジイ		保54-1105
6	A	2.70	スダジイ		
7	A	1.81	シイノキ		
8	A	1.35	スダジイ		
9	B	1.95	サクラ	B；三木ホール裏・幼稚園	
	B	1.19	サクラ		
10	B	1.30	サクラ		
11	B	1.45	シラカン		
12	B	1.47	シラカン		
	B	1.05	クロマツ		
13	B	1.40	サクラ		
14	B	1.34	マツ		
15	B	1.50	シラカン		
	B	1.17	シラカン		
16	B	1.39	シラカン		
17	B	1.42	スダジイ		
18	B	2.08	スダジイ		保54-1124
19	B	1.30	スダジイ		
20	B	2.04	サクラ		
	B	1.05	シラカン		
21	B	1.39	シラカン		
22	B	1.35	シラカン		
	B	1.02	シラカン	幼稚園西側	
23	B	1.30	シラカン		
24	B	1.57	ヒマラヤスギ		
	C	1.16	スダジイ	C；生活科学研究所前	
	C	1.17	スダジイ		
25	C	1.50	スダジイ		
26	C	1.82	スダジイ		保54-1121
27	C	1.27	スダジイ		
28	C	1.45	スダジイ		
29	C	1.33	スダジイ		
	C	1.10	スダジイ		
30	C	1.93	スダジイ		保54-1122
31	C	1.28	マツ		
	C	1.14	スダジイ		
32	C	2.30	スダジイ		保54-1120
	C	1.10	スダジイ		
	C	1.11	シイノキ		
33	C	1.31	マツ		
34	C	1.24	シラカン		
35	C	1.20	シラカン		
	C	1.09	シラカン		
36	C	1.35	イヌザクラ		
37	C	1.20	クヌギ		
	C	1.02	クヌギ		
	C	1.06	クヌギ		
	C	1.17	シイノキ		
	C	1.14	シイノキ		
	C	1.05	シイノキ		
38	C	1.63	シイノキ		
	C	1.14	シイノキ		



東京家政大学学園での武蔵野の森の復活を目指して

39	C	1.71	ヒマラヤスギ	120号と100号の間	
40	C	1.56	ヒマラヤスギ	120号と100号の間	
41	C	1.69	ヒマラヤスギ	120号と100号の間	
42	C	1.56	ヒマラヤスギ	120号と100号の間	
43	C	1.39	エノキ		
44	C	2.69	スタジイ		保54-1109
	C	1.14	アオギリ		
	C	1.08	スタジイ		
45	C	1.64	スタジイ		保54-1110
46	C	1.74	スタジイ		保54-1111
47	C	1.48	シラカシ		
48	D	1.20	サクラ	D ; 3. 4・6・7号館前	
	D	1.18	スタジイ		
49	D	1.80	スタジイ		
50	D	1.28	スタジイ		
51	D	1.26	スタジイ		
	D	1.10	スタジイ		
52	D	1.64	シラカシ		
53	D	1.63	シラカシ		
	D	1.10	シラカシ		
54	D	1.87	スタジイ		
55	D	1.32	ケヤキ		
	D	1.12	ケヤキ		
56	D	1.37	ケヤキ		
57	D	1.54	ケヤキ		
58	D	1.31	スタジイ		保54-1119
59	D	1.55	シラカシ		
	D	1.16	シラカシ		
60	D	1.65	ポプラ		
61	D	1.42	ミズキ		
62	D	1.56	シラカシ		
	D	1.07	ミズキ		
63	D	1.69	シラカシ		
64	D	1.38	スタジイ		保1114
65	D	1.69	スタジイ		
66	D	1.70	スタジイ		
67	D	1.86	スタジイ		
68	D	1.20	シラカシ		
69	D	1.36	スタジイ		
70	D	1.35	シラカシ	ナースリー内	
71	D	1.51	シラカシ		
72	E	2.74	スタジイ	E ; 9号館と図書館前	保53-38
73	E	2.50	クヌギ		
74	E	2.40	スタジイ		保53-386
75	E	1.65	シラカシ		
76	E	1.40	サクラ		
77	E	1.53	サクラ		
78	E	1.32	シラカシ		
79	E	1.22	マツ		
80	F	1.38	ヒマラヤスギ	F ; 寮とプール	
81	F	1.28	イチョウ		
82	F	1.78	サクラ		
83	F	1.94	スタジイ		
	F	1.08	スタジイ		
84	F	1.83	スタジイ		
85	F	1.73	スタジイ		
86	F	1.25	スタジイ		
87	F	1.44	ヒマラヤスギ		
88	F	1.33	ヒマラヤスギ		
	F	1.18	イチョウ		

89	G	1.31	ヒマラヤスギ	G ; クラブ部室と朝鮮学校の間
90	G	1.52	ヒマラヤスギ	
	G	1.00	クリ	
91	G	1.35	ヒマラヤスギ	
	G	1.14	クリ	
92	G	1.55	ヒマラヤスギ	
	G	1.03	ヒマラヤスギ	
93	G	1.55	ヒマラヤスギ	
	G	1.02	ヒマラヤスギ	
	G	1.19	ヒマラヤスギ	
	G	1.17	ヒマラヤスギ	
	G	1.18	ヒマラヤスギ	
94	G	1.42	ヒマラヤスギ	
95	G	1.33	ヒマラヤスギ	
96	G	1.23	ヒマラヤスギ	
97	G	1.70	ヒマラヤスギ	
98	G	1.28	ヒマラヤスギ	
99	G	1.45	ヒマラヤスギ	
100	G	1.41	ヒマラヤスギ	
101	G	1.33	ヒマラヤスギ	
102	G	1.66	ヒマラヤスギ	
103	G	1.26	ヒマラヤスギ	
104	G	1.80	ヒマラヤスギ	
105	H	1.51	マツ	H ; 85周年記念館と運動場
106	H	1.62	マツ	
107	H	1.37	マツ	
108	H	2.77	ボブラ	
109	H	1.54	サクラ	
	H	1.18	ムクヌギ	
110	H	1.30	ケヤキ	
	H	1.04	ケヤキ	
111	H	1.40	ケヤキ	
112	H	1.60	ケヤキ	
113	H	1.45	ネズミモチ	
114	H	1.25	シラカシ	
115	H	1.80	エノキ	
116	H	1.71	トチノキ	運動場東
117	I	1.73	スタジイ	I ; 85周年記念館と中・高校横
118	I	1.30	スタジイ	
119	I	1.31	スタジイ	
120	I	1.70	スタジイ	
121	I	1.80	スタジイ	
122	I	1.68	スタジイ	
123	I	1.32	ネズミモチ	
124	I	1.57	ユリノキ	
125	I	2.58	ユリノキ	
126	I	1.70	ユリノキ	
127	I	1.25	スタジイ	中・高校と9号館の間
128	I	1.90	スタジイ	ビオートープ内
129	I	1.35	シラカシ	ビオートープ内
130	I	1.51	スタジイ	ビオートープ内
	I	1.11	サクラ	中・高校玄関前
131	I	2.14	サクラ	
	I	1.01	クスノキ	
	I	1.09	クスノキ	
132	I	1.63	クスノキ	
133	I	1.30	マツ	

登録番号のある木は、1.5mの高さで幹の周り（周径）が1.2m以上を満たしている。（保存樹木該当）  
登録番号のない木は、準保存樹木該当である。

サクラ10本、マツ8本、ケヤキ6本、ユリノキ3本であり、エノキ、クヌギ、シイノキ、ポプラが各2本、イチョウ、イヌザクラ、トチノキ、ヒノキ、ミズキが各1本ずつで18種であった。ほとんどの木が常緑樹であった。

学園内の樹木の推移について述べると、昭和35年の高橋敬三の調査によると、幹の太さ25cm以上の樹は979本であった。この内訳はカシ440本(45%)、マツ228本(23%)、シイ106本(11%)、ヒノキ73本(7%)、サクラ27(3%)、スギ12本、モチ12本となっており<sup>9)</sup>、この頃から常緑樹が中心となっている。その後、昭和38年の国有財産売買契約書をみると樹木数は796本となっており<sup>9)</sup>、183本減少している。昭和43年の調査によると、651本になっており<sup>7)</sup>、145本さらに減少している。この減少は全て建築に伴うものでなく、自然に枯死した木も多く含まれ、同年の調査で枯死立木106本が確認されている<sup>7)</sup>。しかしながら、大木の減少は人工的な伐採によるものが主であり、我々の調査中でも5号館建替えにより、5本の大木が伐採されてしまい、総数138本より急遽133本に修正した経緯がある。

## 5 学園内の武蔵野の森を目指して(考察)

学園構内の緑は新しい建物が完成する毎に減少していつている。昔を知る人はその減少に危機感を募らせている人は少なくなく、緑が減少するのであれば新築校舎は不要という人もいる。百年史の中には、「緑の学園」というタイトルでつぎのように記されている。

「武蔵野の木立も深く鳥歌う緑の丘辺…、はわが学園の校歌の歌いだしであるが、緑はわが学園を象徴するものであり、みどりヶ丘幼稚園、緑苑祭、緑窓会、緑苑クラブなど緑の文字を使う学内団体名や行事が多いのである。われわれは、大都会の中の学園としては例の少ない緑の学園であることを一つの誇りとして樹木の保護育成に努力してきたのである。学園の歴史を編む者はこの緑の歴史も必ず語るべきことのひとつとしているのである」

このように緑は学園の象徴として古くから重要視されてきた。

平成14年度入学生に対し、進路支援センターが入学日にアンケートを行った。項目選択と自由記載方式でなされ、選択は3項目を選ぶ、または書かせるものであった。結果で志望動機は28項目挙げられたが、学びたい科目、資格取得、就職の有利性などに次いで、「キャンパスの環境がよい」が5位に入った。大学の構内は特にキャンパス campus と呼ばれるが、学究的雰囲気を持つ意味合いがある。キャンパスは緑の庭が付きもので、緑がアカデミックさを盛り上げる。学生は緑の見えるテラスでの学校生活に憧れをいだくのであるが、都内にある大学は都市型構内で、道路の横が建物の入り口という大学が多い。都内にあって緑のある大学はそう多くなく、貴重な財産である。

緑の育成は教育材料として優れている。特に幼児の教育に適し、動物とともに自然観察することで生きた理科教育や情操教育をすることができる。例えば、カエルの交尾や産卵をみることで性や子の誕生などを知ることができ、板上で説明するより効果的である<sup>10)</sup>。

一般に都内に広い敷地を持つ施設は増築により緑が失われてゆく傾向があり、当大学もその

表2 東京家政大学構内樹木内訳 (2001年5月現在)

管財課調査結果

樹木名	数	種類	用途
サクラ	87	落葉高木	花木
ツツジ(1m以上)	76	常緑低木	花木
マテバシイ	69	常緑高木	材木
シラカシ	65	常緑高木	材木
マサキ	54	常緑低木	生垣
サザンカ	53	常緑高木	花木
スギ	53	常緑針葉	材木
ムクゲ	52	落葉低木	花木
ツバキ	51	常緑高木	花木
カイズカイブキ	41	常緑針葉	生垣
サワラ	39	常緑針葉	材木
マツ	34	常緑針葉	材木
ウメ	30	落葉小高木	果樹
ネズミモチ	26	常緑高木	庭木
キンモクセイ	24	常緑小高木	花木
アオキ	23	常緑低木	庭木
ミズキ	20	落葉高木	花木
アジサイ	18	落葉低木	花木
ケヤキ	18	落葉高木	材木
カイドウ	16	落葉小高木	花木
キョウチクトウ	15	常緑低木	花木
カルミア	13	常緑低木	花木
シュロ	13	常緑高木	鑑賞
サンゴジュ	12	常緑小高木	生垣
バラ	12	落葉低木	花木
ミカン	12	常緑低木	果樹
イヌツゲ	10	常緑低木	生垣
カシワ	10	落葉高木	材木
クスノキ	10	常緑高木	緑陰
モミジ	10	落葉高木	紅葉
サツキ	9	常緑低木	花木
シャクナゲ	9	常緑低木	花木
カキ	8	落葉高木	果樹
ナンテン	8	常緑低木	庭木
ヒノキ	8	常緑針葉	生垣
ツゲ	7	常緑小高木	生垣
ビワ	7	常緑高木	果樹
モクレン	7	落葉低木	花木
サカキ	6	常緑低木	花木
スモモ	6	落葉高木	果樹
トチノキ	6	落葉高木	材木
ユリノキ	6	落葉高木	花木
クチナシ	5	常緑低木	花木
トラヨウ	5	常緑高木	鑑賞
ハクチョウゲ	5	常緑低木	花木
クヌギ	4	落葉高木	材木
クワ	4	常緑高木	鑑賞
コナラ	4	落葉高木	材木
サルスベリ	4	落葉小高木	花木
ポプラ	4	落葉高木	街路樹
ヤツデ	4	常緑低木	庭木
アオギリ	3	落葉高木	材木
イチヨウ	3	落葉高木	紅葉
カナメモチ	3	常緑高木	生垣
クリ	3	落葉高木	果樹

樹木名	数	種類	用途
クロガネモチ	3	常緑高木	鑑賞
ジンチョウゲ	3	常緑低木	花木
ツガ	3	常緑針葉	材木
ヒイラギ	3	常緑小高木	庭木
ヤナギ	3	落葉高木	街路樹
ユッカ	3	常緑低木	花木
ライラック	3	落葉低木	花木
アンズ	2	落葉高木	果樹
イヌシデ	2	落葉高木	緑陰
エゴノキ	2	落葉高木	花木
エノキ	2	落葉高木	緑陰
キャラボク	2	常緑針葉	生垣
ゲッケイジュ	2	常緑小高木	果樹
ナツメ	2	常緑小高木	果樹
ニシキギ	2	落葉低木	紅葉
ネムノキ	2	落葉高木	花木
フジ	2	落葉低木	花木
フヨウ	2	落葉低木	花木
マユミ	2	落葉小高木	鑑賞
モッコク	2	常緑小高木	庭木
ヤマブキ	2	落葉低木	花木
リンゴ	2	落葉高木	果樹
アカシア	1	常緑高木	花木
アカンデ	1	落葉高木	紅葉
アスナロ	1	常緑針葉	生垣
イチイ	1	常緑針葉	庭木
イボタノキ	1	落葉低木	生垣
ウツギ	1	落葉低木	生垣
エニシダ	1	常緑低木	花木
エンジュ	1	落葉高木	材木
カリン	1	落葉高木	果樹
グミ	1	常緑低木	果樹
コデマリ	1	落葉低木	花木
コブシ	1	落葉高木	花木
サンザシ	1	落葉低木	庭木
シャリンバイ	1	常緑低木	花木
ソテツ	1	常緑低木	鑑賞
ドラセナ	1	常緑小高木	鑑賞
ハギ	1	落葉低木	花木
ハナズオウ	1	落葉低木	花木
ボケ	1	落葉低木	花木
モチノキ	1	常緑高木	庭木
レンギョウ	1	落葉低木	花木

総樹木数 1,176本 98種  
 (1m以上の高さの木)  
 常緑樹 805 (68%) 51種  
 落葉樹 371 (32%) 47種

轍を踏んで行っている。わが大学で緑が減少したのは、100周年目を迎えた頃ぐらいであり、以後増築とともに緑が減少している。120年記念棟の建築では、教授会において緑の減少が議論となった。事実緑の減少が生じており、今回の調査で昔の緑について聞き取りをおこなったが、緑の減少を憂慮し、これ以上の増築は望まないという人が少なからずいた。

## 6 学園の増緑を（提言）

東京家政大学は池袋、新宿まで短時間で行けるといふ至便な地にあり、かつ豊富な緑を持つという都内で希な存在である。緑はその存続性を意識せねば減少してゆく傾向がある。学生へのアンケートでは、入学志望動機として立派な建物、施設よりは緑の存在が大きい。増築と同様に「増緑」も必要なのである。つまり、「緑の保存」という護りの姿勢に加え、「緑を増やしてゆく」という攻めの姿勢も必要とされる。増緑策として次のように提言する。

### (1) 学園全体をビオトープとして考える。

学園を全体的な緑地帯として考える。現在、中高校敷地にビオトープが存在するが、学園全体をビオトープと考えて、ビオトープ（緑地帯）が散在している姿にする。緑地帯は種々の形態をとってよいが、都会にある管理型公園にならないように、なるべく自然に近いものにする。

### (2) 森林ゾーンを創設する。

#### ア 少なくとも3箇所の森林ゾーンを

120周年記念棟横、生活科学研究所前の樹林は構内随一の緑であり、武蔵野の森の雰囲気漂わせている。当樹林は昭和55年に新たに設けられたものである。従って、今後新たに創設すれば2, 30年ぐらい経ると、同様の樹林ができる。学園の広い敷地内では少なくとも三箇所の同様の樹林が欲しい。この樹林を中心としたゾーンを森林ゾーンとして色分けして、育成するようにする。

#### イ 森林ゾーンは武蔵野の森を漂わせる

校歌にあるように学園は「武蔵野の木立の深い丘辺」である。武蔵野の森は落葉広葉樹林が主である。国木田独歩は武蔵野の美しさは紅黄葉する落葉樹に代表されとしている。

生活科学研究所前の森林はまさしく落葉広葉樹を主としているので、武蔵野の雰囲気漂わせている。

#### ウ 落ち葉の利用

武蔵野の森は屋敷林の発展したものであるが、薪炭利用に加え、落ち葉による堆肥原料であった。落葉樹は落ち葉の掃除が大変というので嫌われやすく、学園の樹に常緑樹が多いのは掃除の面倒を考えてのことと思われる。常緑樹も新陳代謝のため古葉を年中捨てるので労働力に大差はないが、落葉樹は一時期に集中し落葉させるので、掃除が大変というイメージが固定している。木立の中の落葉まで掻き出して掃除する必要があるか疑問である。ビオトープという概念からいうと落葉も自然であり、放置し肥料化するのが妥当で

ある。路上の落葉は掃除が必要であるが、それを森の中に入れるのも一策である。

### (3) 既存緑地帯の狭小化防止

既存の緑地帯は狭小化する傾向がある。その原因は立て看板、ごみ箱、駐輪場などが道路  
上ではなく緑地帯内に設置されるためである。このため、緑地帯の存在を示すために緑地境  
界を明瞭化する必要がある。このためには置石や草花を緑地の縁に植栽し、狭小化を防止す  
るのがよい。

### (4) 実の成る樹の選定

武蔵野の森は落葉広葉樹を主とするが、樹々の選定は紅葉黄葉の優先ではなく、実の種類  
で行う。これは野生動物、鳥類と獣類への餌提供のためである。実は大中小とあり、各々口  
に入る大きさで動物の餌になるか決まる。大きい実は、トチノキ、クリノキなど、中程度は  
いわゆるどんぐりの実の類でクヌギなどのブナ科がある。小さい実となると、ムラサキシキ  
ブ、ガマズミ、ミズキ、センリョウなどがある。低木として小さい実のなる木を植え、小鳥  
を集めるようにするのが妥当である。

### (5) 野草園の創設

森林のほかに野草の保護と増緑が必要である。野草は種類が多いので、あるジャンル毎に  
括った野草園にするのがよい。例えば、ハーブ園、葉草園、秋の野草園、食べられる野草の  
園などである。武蔵野ということにこだわれば「武蔵野を代表する野草園」として関東タン  
ポポなどの在来種保存を目的とすれば学術的価値がある。

以上が提案であるが、緑の確保には森林ゾーンの他は大きなスペースは要らない。野草園に  
しても従来の芝生地や花壇でこと足りる。駐車場や校舎の横など30cmのスペースを設ければ、  
緑地確保ができる。迅速に実行されることを希望する。

## 引用文献

- 1) 中村和郎編；日本の自然、地域編関東、岩波書店刊、1994
- 2) 国木田独歩；武蔵野、新潮文庫、新潮社、平成14年
- 3) 亀井弘幸；東京都北区における植生復元のための一考察、北区報告書
- 4) [www2.u.biglobe.ne.jp](http://www2.u.biglobe.ne.jp); 雑木林と植物群落の移り変わり（遷移）、1992年5月
- 5) [www.asahi-net.or.jp](http://www.asahi-net.or.jp); 武蔵野の森林（大正初年）、1992年5月
- 6) 中川重年；日本の樹木・下、小学館、1992
- 7) 渡辺学園90年史編集委員会；渡辺学園90年史、1971
- 8) 渡辺学園創立百周年記念事業実行委員会；渡辺学園百年史、1982
- 9) 渡辺学園80年史編集委員会；渡辺学園80年史、1961
- 10) 大澤力；東京家政大学における自然植生の現状と活用の課題